

小畑 和先生を送る

社会学科主任 山田 信行

2010年3月をもって、小畑和先生が定年退職されます。小畑先生は、1939年に北海道旭川市でお生まれになり、子供時代を中国河北省で過ごされました。第2次世界大戦後、北海道にお戻りになり、北海道大学教育学部を卒業されたのち、1971年に駒澤大学北海道教養部に非常勤講師として奉職されました。その後、1973年には専任教員になられ、北海道教養部の廃止に伴い、1999年4月からは文学部社会学科の教授として勤務されてきました。在職期間は、実に37年という長期間に及びます。この間、2003年の4月から2007年の3月まで社会学科の主任を務められ、学科運営と大学の発展に貢献されました。

北海道大学の御出身ということもあるためか、小畑先生といえば、まずはその豪胆でバンカラなお人柄が思い浮かびます。2008年に先生が学生相談室の相談員を務められていたときも、悩みごとを持ち込む学生に対して、独特の口調と立ち居振る舞いによって、叱咤とも激励ともつかない対応ながら、的確に学生に対して問題を克服する展望を与えていたように思います。学科の主任を務められていたときも、先生の豪放な議事運営はとてもユニークで、あたかも学生を相手にするかのようには教員から意見を求めていたことが強く印象に残っています。一見すると強面の風貌ながら、小畑先生は本質的にはとても優しいお人柄だと思います。

このお人柄に関連して、やはり言及しなければならないことは、先生の動物愛護の精神でしょう。とりわけ、先生が稀代の愛猫家であることを知らない者はおりません。毎日、カートや自転車に大量のキャットフードを載せて学内に持ち込み、猫たちにそれを与えている様子を多くの人が見かけているのではな

いでしょうか。餌づけられているこれらの少なくない猫たちには、一匹ずつ名前がつけられているだけではなく、その体毛の性質などの個別の特徴もすべて把握されているらしく、こうした点はまさに愛猫家である先生の面目躍如というところでしょう。

このように手厚く保護されたキャンパス内の猫たちが、小畑先生の退職後、どのような運命をたどるのかについては、とくに猫に思い入れがなくても気になるところです。しかし、すでに少しずつ北海道の御自宅に「空輸」されているとのことで、こうした心配も杞憂に終わりそうです。駒沢キャンパス内である毛並みの良い猫たちをもう見かけなくなるかと思うと、寂しい気もいたします。それに対して、新たに気になるところは小畑先生の御自宅のことです。かなりの数の猫たちを連れていくということは、御自宅がまさに「猫屋敷」の観を呈することになるのではないかと考えられますが、大丈夫なのでしょう。

小畑先生には、たくさんの猫たちに囲まれながら、どうぞお元気でユニークな少子化の研究をますます進められることをお祈りいたします。そして、今後ともわたくしどもをときに厳しく、ときに優しく励ましていただければ幸いです。